

交換留学報告書

氏名	濟木あかね
学部/研究科・学年（留学時）	法文学部人文社会学科 3 回生
留学国名	アメリカ合衆国
留学期間	10 ヶ月
実施年月	2023 年 8 月 4 日～2024 年 5 月 28 日

○はじめに

本報告書では、2023 年 8 月～2024 年 5 月の 2 学期 10 か月間での、イリノイ州 College of Lake County(以下、CLC)での留学を通じて得た学びや体験に関してご報告いたします。また、この度は奨学金というご支援をいただいたことで、有意義な留学生活を送ることができましたこと、心より御礼申し上げます。

○留学の動機

私は愛媛大学で英語学を専攻し、英語を主たる材料として人間の言語に共通した特徴について討論したり、日英語を様々な角度から比較したりすることで両言語への理解を深めることを学びの中心としている。アメリカのコミュニティ・カレッジへの留学では、現地語であり、現地での共通言語でもある英語の能力を上達させ、英語をつかって英語（さらに日本語をはじめとする諸言語）について学び、討論することを通して、専攻分野への理解を深めたいと考えていた。また、英語の母語話者や日常的に英語を使用している人々と生活や学びを共にすることで、ことばの感性を磨き、英語運用能力を高めるとともに、英語をつかって考え、自分の意見を発信することを目標のひとつとし、留学を志願した。

○その大学を選んだ理由

私が CLC を留学先として選択した理由は、①愛媛大学との協定校であったこと、②協定校の中で唯一のコミュニティ・カレッジであったことの二点が主である。

①に関して、協定校制度を利用するにあたって、単位互換や学費相互不徴収などの制度が充実していたことが主な理由である。また、私の指導教員と現地の教授数名とがお互いに既知であり、心理的にも安心して留学できると考えたからだ。

②に関しては、私は高校 2 年の時に一度、出身市と姉妹都市提携を結んだカナダのポートアルバー二市での一週間のホームステイに参加したことがある。その時の私は英語が技術的に未熟であったこともあり、うまくコミュニケーションを取ることができず、ホストファミリーからも Google 翻訳を介して質問されてしまった。その時に非常に悔しい思いを

したことがひとつの契機となり、高校・大学と英語を必死に学び続け、3年経った現在、今こそもう一度自分の力を試したいという思いを強く持っていた。CLC は地域に根差したコミュニティ・カレッジであり、学生寮がないことからホームステイ、ないしそれに相当するような滞在が必須となるため、以前の「リベンジ」を果たせるのではないかと考えた。

また、CLC には、大学進学だけではなく、主にインターンシップを目的として、地域企業とのつながりを求めるなど、様々な目的をもって、年齢やバックグラウンドが多岐にわたる人々が在籍している点も魅力的であった。私と同年代の人だけではなく、社会人となったのちに働きながら通う学生や、働きながら自らの学費を稼ぎ学業に努める学生など、勤勉な人が多く在籍しており、夢や目標に向かって努力する環境に自ら身を置くことができる。そのような環境下で学ぶことは、英語学習を多角的に深めたいという目標だけでなく、将来のキャリア探索へのモチベーションを維持向上させるという目標のためにもきわめて有効であると考えた。

○留学先で学んだこと

1. 第1セメスター

第1セメスターでは、「南北戦争までのアメリカの歴史(US History to 1876)」、「英作文1 (English Composition I)」、「新入生セミナー(American College Success Seminar)」を対面で、「英語・バイリンガル教育論(ELL/Bilingual Education Theory)」を、Zoomを通じたオンラインで受講し、合計12単位を取得した。授業の事前課題として、毎授業ごとに数十ページのリーディング課題が課され、その内容をもとに授業が行われるという点が、まずは一番の壁となった。また、授業も大講義室で受けるようなものではなく、最大で20名ほどの比較的小規模の講義が多く、授業自体も教授と生徒の双方向、また生徒同士のコミュニケーションを求められる場合も多くあった。特に、アメリカの歴史の授業では留学生が誰も受講しておらず、既に背景知識を多く持った国内の学生のみであったため、グループワークで意見を求められた際や講義内での「有名な○○」というカテゴリで登場する人物や曲などがわからず苦労した。Zoomで受講した「英語・バイリンガル教育論」では、毎回の予習課題としてワークシートが与えられ、事前に質問や理解点などを纏めてから授業内でペアになった学生と意見を共有する時間が与えられたため、オンライン講義でありながら同じクラスメイトと話す機会が多く、またオンライン講義と言うことで現地の小学校等の教育機関で働きながら受講している方など、日中に受ける授業よりも更に多様性のあるクラスだったことが印象に残っている。

2. 第二セメスター

第二セメスターの履修は、自分の担当の”Academic Success Adviser (アカデミック・サクセス・アドバイザー/ASA)”の方と相談して履修を決定した。新入生セミナーや英作文の授業などが必修として履修しなければならなかった第一セメスターと比較して、

第二セメスターは自由度がかなり上がり、自分がかねてより履修したかった専攻外かつ愛媛大学では開講されていない科目の履修ができたことが、一番の収穫であった。今セメスターでは、対面で「会話スペイン語 I (“Conversational Spanish I”)」「グラフィックデザイン入門 (“Introduction to Graphic Design”)」「デジタルメディア入門 (“Introduction to Digital Media”)」「1760 年から現在までのアメリカの歴史 (“US History 1876 to Present”)」、完全オンライン授業として「言語学と社会 (“Linguistics and Society”)」の 5 授業、計 16 単位を取得した。特に、スペイン語の授業に関しては、出国前に履修予定にはなかったものの、前半の五か月間を経て、現地でいかにスペイン語話者が多いか、いかに重要であるかを実感し、履修を決めたものであったので、この授業を現地で履修できたことは一つの大きな成果であったと考える。また、講義自体もスピーキングの機会が多く、実践的な授業で大変だったがその分やりがいを感じることができた。また、「グラフィックデザイン入門」と「デジタルメディア入門」に関しては、以前からデザインに興味があった私としては実際に履修できたことは、今後のキャリアにも生かすことができる良い機会となった。

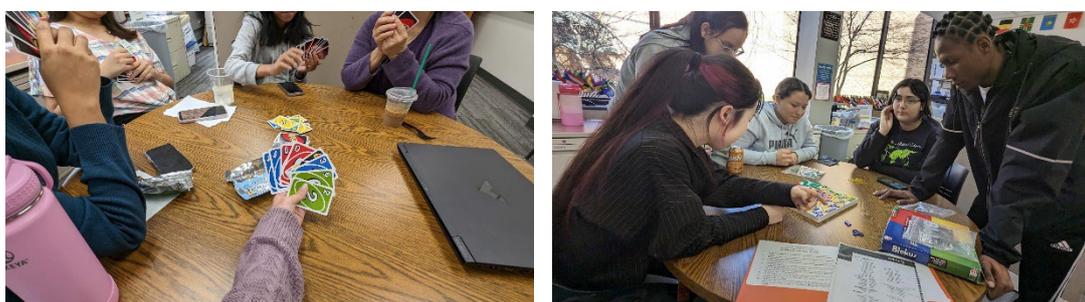
○現地での生活（住まいや食事）

現地では、一軒家のうちの一部屋を借りて、第一セメスターは愛大派遣ルームメイトと、第二セメスターは一人暮らしをしていたが、同じ家に住む他に 2 名ないし 3 名と共同生活をしていた（契約時のことなどは後述）。車が生活において必需品であるアメリカにおいて、車なしでの生活はとて難しいため、少し家賃が高くとも CLC から比較的近く、かつスーパーなど生活必需品を購入できる拠点からも近い場所を選んだ。実際、CLC までバスで 15 分ほど、直近のスーパーまでは徒歩で 15 分ほどのところに住んでいた。食事も自炊が多く、外食は友人と遊びに行くときなどの限定し、生活費を抑えていたが、その分、作ったことのない友人の国の料理なども挑戦したりした。



(左: 10 か月間滞在した家 右: 現地では作ったことのない料理にも挑戦した)

大学へは金曜以外毎日バスで通学していた（第二セメスターは仕事のために金曜日
も朝から通学するようになっていた）。授業以外の時間は、図書室にて勉強することも
あったが、基本的には Department of Global Engagement（国際連携課、略称 DGE）
にて過ごすことが多かった。DGE は留学生だけではなく、全生徒に対してオフィスの
共用スペースを解放しており、いすや机だけではなく、ゲーム類や軽食なども置かれ
ており、自由に話したり遊んだりすることができるようになっていた。その場所は特
に私のような友人を作りたい学生にとっては絶好の場所で、また多くの留学生、そし
て留学生とかかわりをもちたい現地学生が集まり、いつも賑やかであった。CLC での
友人のほとんどは、そのオフィスで出会った人たちだ。



(左:DGE オフィスにて友人たちと UNO 右:ボードゲームを遊んでいる様子)

○留学先で楽しかったこと

留学先での一番の思い出は、と尋ねられたとき、私は真っ先に「DGE のオフィスで
友人たちと話した時間」を挙げるだろう。実際、シカゴ観光や学内外の課外活動など
にも参加したが、やはり最も長い時間を過ごした場所が一番印象に残っている。仮に、
この DGE のオフィスが解放されていなければ、私が今回留学を通じて知り合った友人
たちとこれほど仲良くなることもできず、学校と滞在先の往復になっていたと思う。
授業の前後や合間に友人たちとカードゲームをしたこと、他愛もない会話を共通言語
である英語を使用して行ったことは、今の私の英語能力を大きく向上させたことだけ
ではなく、遠く離れた今となっても連絡を密に取り続けるかけがえのない友人を得る
ことができた。また、仲良くなった友人らでボウリングやショッピングに行ったこと
もよい思い出の一つだ。



(左上:友人宅での誕生日パーティー 右上:友人たちとのボウリング)

(左下:シカゴブルズの試合観戦 右下:ヴァレンタインデーイベント どちらも DGE 主催)

また、最後に、友人たちからは多くの手紙やプレゼントなどを手渡してくれたことも、別れの悲しみと同時にとてもうれしいものだった。ある友人は、CLC のロゴの入った小さなノートにオフィスの友人ら・スタッフの皆さんからのメッセージを集め、写真とともに、寄せ書きを贈ることを企画してくれた。彼らが贈ってくれた手紙、プレゼント、そして言葉は何よりの宝物であり、私の心の支えとなっている。



○留学中苦労したこと

現地での住まい探しは、最初特に苦労した点であった。私は現地に知り合いや親類等、生活面で頼ることのできる相手は全くいなかったため、到着から2週間は長期滞在用のホテルに滞在し、その間に現地で住まいを探す、という到着早々に綱渡り状態となった。コミュニティ・カレッジと言うこともあり、多くの学生は現地出身か、または親類などを頼るなどしているため、4年制の“University”と異なって学生寮が無かったのである。

契約期間が一年に満たないこと、現地の保証人がいないこと、SSN (ソーシャルセキュリティナンバー、日本で言うマイナンバーのようなもの) が無いことなどから

アパートを自分名義で借りることはできない。なので、私は Facebook の「地域の家探し/部屋貸し」のグループチャットにて、部屋探しの旨を予算などとともに投稿し、連絡を待った。幸い直ぐに連絡が入り、内見に行くことができたが、貸主の方との会話、家賃交渉や契約等を、現地到着後の慣れない環境下でやり遂げたことはとても苦労した。しかし、同時に、それをたった一人でやり遂げたことは、今後生活していくうえでの大きな自信にも繋がった。

また、第二セメスターからは留学生のチューター (Peer Mentor) として、DGE のオフィスにて働き、学内雇用ではあるものの、現地での社会経験を積むこともできた。この仕事は、新入留学生のいわば「先輩」として新入生オリエンテーションの企画運営補助だけではなく、学校生活や日常生活のサポート、相談役がメインとしながら、DGE のオフィスにて訪問者や電話での問い合わせ対応、留学生などからの質問への回答、DGE 主催イベントの企画運営の補助、その他オフィスのスタッフの業務の補助など、仕事内容は多岐にわたった。自分の担当留学生 4 名との接し方や、慣れない電話対応など、困難は多かったが、セメスター後半では、オフィスの Director (部長格) の方から「君にしか任せられない仕事だ」と信頼して仕事を任して下さることもあり、とてもやりがいを感じる事ができた。



(左:Peer Mentor 初仕事の新入留学生オリエンテーションにて、同僚と)

(右:任期終了のねぎらいとしてディナーに招待いただいたときの写真)

また、第二セメスター中盤ごろに、日本語のチューターとしても働く機会にも恵まれた。働き始めは全く学生が訪れない日が続いたが、実際に日本語の授業時間中に訪問して自己紹介などを行うことで、最終的には週 4 時間すべてにおいて学生を迎えることができ、充実した時間を過ごすことができた。

○終わりに

大学 4 年間で、アメリカに 1 学年分滞在し、現地で学ぶことができたことは、私にとって大変貴重な経験となった。特に、「学問を修める」という意味での留学に加えて、実際に現地での就労経験を積めたことは交換留学生としても全員が経験するものではなく、

私の今後のキャリアにも大きく影響を与えることになるだろう。また、現地語であり、現地での共通言語でもある英語の能力を上達させ、英語をつかって英語、さらにはスペイン語について学び、討論することを通して、専攻分野である言語学への理解を深めることができたことは、私の今後の卒業研究にも大いに役立つ経験だったと思う。何より、先に述べたように自らが実際に外国人として生活し、留学生として他の学生らと学び、そして切磋琢磨しあう環境に身を置くことで、今までに感じたことのないような心の変化や人との結びつきを実感することができたことが、今回の留学での最大の成果であった。

